

東日本大震災をいかに乗り越えるか：福島県における子どもの実態と保育の研究？（温故知新プロジェクト）

著者	大澤 力, 増田 まゆみ, 岩田 力, 川合 貞子, 細田 淳子, 関 章信, 生駒 恭子, 高荒 正子
雑誌名	東京家政大学生生活科学研究所研究報告
巻	38
ページ	107-114
発行年	2015-07
出版者	東京家政大学生生活科学研究所
URL	http://id.nii.ac.jp/1653/00009978/

《温故知新プロジェクト》

東日本大震災をいかに乗り越えるか
—福島県における子どもの実態と保育の研究 III—

大澤 力*¹ 増田まゆみ*¹ 岩田 力*¹ 川合貞子*¹ 細田淳子*¹
関 章信*² 生駒恭子*³ 高荒正子*⁴

How to Get Over the Great East Japan Earthquake
A Study of the Actual Conditions on Children and
Care for Children in Fukushima Prefecture (Part 3)

Tsutomu OSAWA, Mayumi MASUDA, Tsutomu IWATA, Teiko KAWAI, Junko HOSODA,
Akinobu SEKI, Kyouko IKOMA, Kumiko ITOU, and Masako TAKAARA

1. はじめに

平成24年4月より研究を開始した温故知新プロジェクト『東日本大震災をいかに乗り越えるか—福島県における子どもの実態と保育の研究』は、3年を経て、研究期間満了を迎えることとなった。本研究の目的は「この難局を乗り越えるべく、東京家政大学児童学科・保育科が積み上げてきた保育研究の成果を活用しつつ、福島県の幼稚園及び保育所との連携に基づく保育実践研究を中心として乳幼児の健やかな成長・発達を支えることに貢献する」ことにある。研究概要は、以下のABCDからなる。

〈平成24年度〉A：モデル園（4園）での観察とグループインタビュー調査を集約・検討・考察しまとめる。

〈平成24/26年度〉B：放射能汚染対応の先行事例研究＝広島（原爆投下後の復興）文献・聞き取り調査。ベラルーシ（チェルノブイリ事故後の復興）文献・実地調査を実施し、子どもの成長・発達に関わる研究成果や保育実践状況を把握し、その成果をまとめる。

〈平成24/25/26年度〉C：モデル園での保育。実践研究＝現状把握に基づき、工夫ある保育を3年間継続実施し、その成果と課題をまとめる。

〈平成24/26年度〉D：A/B/Cに関する研究成果の発表・啓蒙＝学会などで研究成果の発表を行う。平成24年度一般公開シンポジウム「福島県の保育—東日本大震災を乗り越えていくために—」の実施および最終年度のまとめとして平成26年度に「シンポジウム in 福島子どもの健やかな育ちをめざす～東日本大震災から何を学び、どのようにいかす

か～」公開シンポジウムを開催する。

本年度は最終報告であることを考慮しつつ、その総括として平成26年度の成果を中心に、ABCDを概観する内容にて報告する。

2. 研究対象及び方法

1) 研究対象

平成24・25年に引き続いて福島県内の、放射能汚染が課題となっている、福島市（幼稚園・保育所）、いわき市（幼稚園）、本宮市（保育所）をモデル園とした。さらに、本研究の総括として医学・保育学の2つの観点からシンポジウムを福島市内で開催した。

2) 研究方法

福島県内の4モデル園の継続的な協力を得て平成25年度の保育実践の評価に基づき、モデル園の園長・副園長・主任等管理職と教員及びリーダー学生との打ち合わせにより、計画を進める。

その際、1・2年目の保育研究の成果を活かした保育への取り組みとなるよう進めた。

【研究期間】平成26年4月～平成27年3月

【倫理的配慮】

本研究に際し、研究の目的・方法を確認し、保育等実践のビデオ・写真撮影、シンポジウム等の記録をとることの了解を得、学会発表、報告書作成等研究以外には使用しないこと、個人が特定されるような表記はしない等、個人情報取り扱いに十分配慮した。

3. 結果と考察

1) 先行研究報告 その②

平成24年度に続き2回目のベラルーシ実地調査を実施し

*¹ 東京家政大学 (Tokyo Kasei University)

*² 福島市福島めばえ幼稚園 (Fukushima Mebae Kindergarten)

*³ いわき市ほうとく幼稚園 (Houtoku Kindergarten)

*⁴ 福島市あすなる保育園 (Asunaro Day Nursery)

た。以下にその概要を明示する。

- ・調査期間：2014年9月12日（金）～9月20日（土）
7泊9日〈宿泊地：ミンスクおよびゴメリ〉
- ・調査者：大澤 力（研究代表者・環境教育研究者）
岩田 力（共同研究者・小児科医師）
- ・調査目的：チェルノブイリの原子力発電所事故収束後約30年経過した隣接国ベラルーシ（首都：ミンスクおよび原発関連研究中心都市ゴメリ）における乳児・幼児・学童の健康や成育状況に関する調査を実施し、日本における現状の改善に資する
- ・調査成果：ベラルーシの首都ミンスク市における農家・祭り・放射能安全研究所・小児病院・SOS子どもの村などにおける活動実態やミンスク・ゴメリ両市における幼稚園・小学校^{注1)}を対象に、原発事故以降の28年間どのように持続可能性教育における科学性から課題解決能力育成に資する持続可能性教育、特にチェルノブイリ原発事故に起因する放射能汚染と自然遊び・子どもの健康で、どのような教育実践が行われてきたのかを把握することができた。さらに、放射能汚染に関する実態やその後の対策、現在の健康調査など、先進事例としてのベラルーシにおける活動の実踏調査をしつつ、意義や効果、理想的なあり方等を探ることができた。

今回の調査にて特に明確となった事項を報告する。結論から言うと、ベラルーシ政府の見解としては、28年の月日が経過したことにより、主要放射能物質のマイナスの影響はひとまず収束したことを前提とした政策や対応がなされている。しかし、ゴメリなど汚染の激しい地域の一部では、現在でも立ち入り禁止区域が存在し、その周辺地域では、現在も定期健康診断を実施する幼稚園・小学校等が存在する。今回、ゴメリ市内の汚染度の高い地域にある幼稚園・小学校での放射能汚染に関する定期的な移動式簡易全身調査に同行することができた。岩田教授（医師）の見解によると、精密さといった点では、現在の日本の水準に至っていない可能性がある。また、首都ミンスク市内での小児病院を見学することができたが、日本より輸入された医療用精密機械：CT スキャンなどを駆使した先端的な小児の継続的健康状況調査が実施されていた。また、放射能汚染に関する教育では、首都ミンスク以外の中小都市の一般家庭生活は、現在でも公務員やサラリーマンとして働きつつも、自給自足的な生活形態が色濃く残っており、その体内へのマイナス影響を減らす意味からも食育が重要視されていた。自然遊びに関しては、ミンスクでは特に配慮はなく、ゴメリの一部地域で土壌汚染や動植物からの影響に配慮している学校があった。現在、ベラルーシ政府として

^{注1)} ベラルーシの小学校学校教育では、日本の小学校と中学校にあたる内容の一貫教育がなされている。

は、政治経済の活性化を目指し、ロシアとの関係を主軸として、中国との経済関係構築に精力的であった。ちなみに、ロシア・中国とも出入国は簡便である。

2) モデル園での保育実践

(1) 保育実践取組の基本的考え方とテーマ

本研究1年目のモデル園の実保育観察、保護者及び保育者へのグループインタビューを通して把握したモデル園の子どもや家庭、また保育の実態、及び保護者と保育者の意識から、モデル園での保育実践のテーマを2つ設定した。戸外活動、自然物との触れ合い等が制限され、体力低下や不安定な状態等を生み出していること、また、避難ははじめ、人間関係が希薄になっていることに着目し、第1は、自然物との触れ合いも含めて感覚を駆使し、身体を十分に動かす体験、第2は、人と人との繋がりを深める・広げる体験とした。

(2) 保育実践の経過と考察

1年目（平成24年度）は、モデル園いずれも、戸外活動が制限され、自然物との触れ合いができない状況であり、自然物（大学構内の落ち葉を持参）を使った遊びを中心とする活動展開とした。その際、身体を十分に動かすことと、人との繋がりを豊かにする保育となるよう配慮して取り組んだ。

（増田他：東日本大震災をいかに乗り越えるか I—福島県における子どもの実態と保育の研究—）

2年目（平成25年度）は、保育の連続性、協働性を大切にしながら、共通のテーマとして「年齢や生活の場を越えた子ども相互の関係、子どもと大人（保育者・親・祖父母・友だちの親・学生）との関係等、人と人との関わりの広がり」であった。人との関わりを、「同一年齢クラスから異年齢編成へ、保育者と友だちとの関係から家族と共に」、「一つの園から地域の複数の園の親子へ」、また、「保護者（親）から祖父母へ」とそれぞれ、平成24年度の実践を基盤に広対象を広げて取り組んだ。限られた時間での活動であったが、それぞれの取り組みを通して、保育の基本である遊びを通して、多様な人間関係を形成していく保育の工夫やその意義を確認できた。（増田他：東日本大震災をいかに乗り越えるか II—福島県における子どもの実態と保育の研究—）

3年目（平成26年度）は、福島県内の除染がかなり進み、モデル園においても、戸外での活動制限が次第に減少していった。

26年度の共通テーマを、人間関係をさらに広げ、地域の中で、多様な人と人を繋げる保育実践、すなわち「地域に開かれた保育」と設定し、3つのモデル園で取り組んだ。

それらの保育実践の概要は以下のとおりである。(なお、福島市内のモデル園(幼稚園)は、本年度はシンポジウムの企画・シンポジストの役割を担った。)

(i) モデル保育園(福島市)

平成24年度は、年齢別の2クラスで、落ち葉と触れ合い、身体を十分動かす活動で構成されたプログラムでの保育実践であった。

平成25年度は休日に実施し、3、4、5歳児・保育者・家族・学生・養成校の教員で構成されるメンバーであった。子どもも大人も思わず動きたくなる、やってみたくなる保育所室内の多様なスペース(3歳未満児保育室・廊下・3、4、5歳保育室・ホール等)を活かし工夫ある環境で、自然物を用いた制作、また、感覚を駆使し全身を使った活動等を、いつもとは異なる多様な人との関わりを持ちながら展開した。

平成26年度は、引き続き休日(10月11日)に実施し、「異年齢の園児(年中・年長)とその保護者・小学生(卒園児1、2年生、震災時在園)とその保護者・保育者・学生・養成校教員(造形担当者も参画)と、人間関係の広がりの中で、協働して園庭防護壁の描画活動に取り組んだ。

①活動テーマ

「咲かせよう あすなるの花 広げよう あすなるの輪」

②実施日

2014年10月11日 13:30~16:00

③対象

年中児(10名)・年長児(15名)とその保護者、小学1年生(10名)・2年生(7名)とその保護者

④ねらい

- ・おはなしの世界に入り込んで想像することを楽しむ。
- ・体を思いきり使って、描画活動やパラバルーンでの活動を楽しむ。
- ・友達や卒園児、保護者などと一緒に、新しい「あすなるの世界」を創り上げる達成感を味わう。

⑤結果と考察

震災後、3年半を経過して、樹木が多く除染が難しい園舎後方を除いて、園長、保育者等職員、そして保護者の創意と努力により、園庭が使用できるようになった。木々の間を走り回り、木の実を拾う子どもたちの姿に、また、新設された大型滑り台でダイナミックに滑り降りる子どもたちの笑顔が見られた。

斜面を支える長く厚いコンクリートの壁面を、震災後久しぶりに出会った3、4、5歳の在園児と1、2年生の卒園児の保護者が協力して真っ白に壁に塗り替えた。学生と共にゲームを楽しみ、共通のイメージを持った子どもたち

は、グループカラーの“7色の魔法のコート(大型カラービニール袋製)とマスクを着け、グループごとに手形のスタンプング、絵の具を流し落とすなどして、保護者や保育者、学生の見守りの中、描画活動に取り組んだ。



写真1 あすなるの花(描画活動)

遊び環境として重要な園庭で、大震災を経験した4歳から8歳までの子ども、保護者、保育者、学生、養成校教員とが協働して、園庭防護壁描画活動に取り組むことにより、集った人の未来に向けた思いを具現化し、新たな空間を創造する喜びを味わっていた。

(ii) モデル保育園(本宮市)

本宮市は、就学前の保育(幼稚園・保育所・幼保総合施設)を幼保学校課が統括し、福祉・教育に分断せず全ての就学前の子どもを対象とする行政体制を先駆的に実施している。

平成24年度は、公立保育所(1カ所)年齢別クラスで、落ち葉と触れ合い、特に5歳児は、ホールで友だちと協力し合うことやダイナミックな動きを取り入れた活動で構成された保育実践であった。

平成25年度は、本宮市内の保育所4カ所の5歳児(50名)と保護者(42名)と対象を広げ、小学校就学を具体的にイメージするようになる11月に実施した。

平日に、4保育所が合同で、加えて保護も共に活動することを可能にしたのは、保育実践の意義を理解し、保育所長はじめ保育者の方々の協力体制であった。保護者のアンケートにも、やがて小学校で出会う園を越えた多くの子どもや大人と関わる体験を続けて欲しいという願いが綴られていた。

平成26年度は、公立保育所3カ所17名、学校法人幼稚園1園2名、本宮市立A小学校1・2年生11名、本宮市立B小学校1・2年生11名計41名の子どもと、公立保育所3カ所所長・副所長・担任の計9名の保育者、学生、養成校教員(音楽担当者も参画)と多彩な構成であった。

①活動テーマ

「森のなかまたちと音楽家になろう!~みんなで作ったた

いこで、うたって、おどって、輪になって…」

②実施日

2014年12月6日（土）10:30～11:00

③対象

年長（19名）、小学1・2年生（22名）及びその保護者

④ねらい

- ・様々な年齢の友達と一緒に歌ったり、体を動かしたりすることを楽しむ。
- ・自分で作った楽器で音をならす喜びを感じる。
- ・みんなで手作り楽器を演奏し、一体感を味わう。

⑤結果と考察

本宮市内の保育所、幼稚園、小学校の子どもと保護者が一堂に会するという画期的な活動であった。この保育実践を実現するために、慌ただしく、日々の保育の展開も厳しい状況の中で、乗り越えなくてはならない困難なことが、多々存在したと考えられる。しかし、前述したように、本宮市が、「幼保学校課」を就学前施設と小学校とを統括する課として位置づけ、保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、そして学習指導要領の全てが重要なものとして提示している「幼・保・小の連携」を市の基本姿勢として打ち出す体制と保育所長はじめ関係者の熱意があつてこそ、こうした成果を得ることができた。当日は、市内中心部の会場に車で家族全員参加といった姿が目立った。

日常に出会っている子ども、久しぶりに出会う子ども、初めて出会う子どもと多様な人との出会いを親子で楽しめるよう、プログラムの内容と順序を、音楽教育を専門とする教員も加わり共に検討した。大人も子どもも一緒に、たいこ、マラカス、タンバリン、鈴、ギロなど自然物を生かして楽器を作ること、また、その楽器を使って多くの人と心を合わせて奏でる、歌う、音楽に合わせてリズムカルに動くなど、これまでにない体験を楽しむ姿が見られた。

(iii) モデル幼稚園（いわき市）

平成24年度は、震災後、家族との活動ができなかったことから、休日に4、5歳児の保護者・きょうだいが、保育者や学生と共に、落ち葉や木の実など自然物との触れ合い、身体を十分動かすプログラムでの保育実践であった。

平成25年度は、震災後、祖父母と共に行う活動ができなかったことから、3、4、5歳児とその祖父母を対象とし、「1学期にした遊びや夏の経験を取り入れた遊びを祖父母・友だち、学生と一緒に楽しむ」ことをねらいとし、敬老の日に実施した。

平成26年度は、震災の翌年から始まった、地産地消の復活を目指し、商店街や公共施設をめぐるウォークラリー

へ3、4、5歳児の親子で参加、学生も写真館を開設して参加した。

①活動テーマ

探検—未来地図を描こう—

保護者・幼稚園教諭・学生協働による保護者主催の園近隣家族参加ウォークラリー & マルシェ（市場）活動

②実施日

2014年11月1日（土）10:00～15:00

③結果と考察

2011年3月11日の東日本大震災発生時、地響きや地割れ、揺れや地滑りなど想像を絶する被害の大きさに身の竦む思いとともに大きな不安に襲われたという。こうした辛い経験から、「みんなで力を合わせ、自分たちの命を守る」といった考えに基づき、震災の翌年からスタートした「ウォークラリー」。年々人間関係の広がりが充実し、今回で3回目である。地元の食材・食品（野菜・果物・蜂蜜・お惣菜など）を豊富に準備し、多くの手作り作品の販売も行われ、東京家政大学々生による写真館も好評であった「マルシェ（市場）」子どもたち、保護者の方々、地元の関係者など、皆さんの笑顔が印象的な明るく楽しい展開となっていた。



写真2 探検—未来地図を描こう

3) 福島市内での公開シンポジウム

2014年12月7日（日）福島市内ホール

3年間の研究総括シンポジウム

「東日本大震災をいかに乗り越えるか—福島県における子どもの実態と保育の研究—子どもたちの健やかな育ちを目指す総合シンポジウム—

シンポジスト：市川陽子・関 信章・伊藤ちはる・高荒正子・石井美千代・伊藤 徹・岩田 力

コーディネーター：増田まゆみ

企画：大澤 力

福島市内中心部で開催されたシンポジウムでは、子どもの心身の健康・育ちを医学的観点も含めて子ども学・保育学の視点から積極的な意見が提示された。後のさらなる連

携や研究実践のより望ましい方向性を探り、子どもたちの健やかな育ちを目指した保育実践研究の強化を図るための主旨は十分に達することができた。以下にシンポジウムにおける市川陽子医師、伊藤ちはる副園長、高荒正子園長、岩田力教授（医師）の提言をまとめて示す。

(1) 市川陽子（福島県小児科医会常任理事・いちかわクリニック）

—放射能汚染と健やかな子どもの育ち 医学の視点から—
福島県での実態と課題

東日本大震災に伴う東京電力福島第一原発事故後、放射能被ばくによる健康被害について、専門家の方々のさまざまな意見やメディアの情報が錯綜し、そのために福島県民は誰の何を信用して良いのかわからない不安をかかえながら生活している。その不安の正体は、◎先の見通しがわからないこと、◎何を信頼すればいいのかわからないことの2つに尽きる。

「なぜ放射線がこんなに嫌われるかという、放射線によって体内でできる活性酸素が遺伝子を損傷するからである。しかし、この活性酸素は喫煙、不安やストレスなどでも増える、むしろこちらの方が多い、がんなどの病気になる原因はたくさんあり、その中に放射能・紫外線等というものもあるけれどその他の環境の要素がたくさんある。「福島の子どもたちの健やかな成育のためには、私たち大人が放射線の正しい知識を持ち、情報を正しく理解することが必要不可欠であり、不安や風評に負けない毅然とした心で自信を持ってこの地で子育てする強さが大切である。」まとめとして以下のような4項目を挙げた。

(i) 放射線の誤解

「外部被ばくと内部被ばくの混同、確定的影響と確率的影響の混同、ベクレルとシーベルトの単位の意味の理解不足、などがあります。」

(ii) 県民健康調査

「これまでの健康調査の結果から、内部被ばく・外部被ばくともに、子どもたちの将来の健康被害の影響は極めて低いことが明らかになっています。」

(iii) これからの生活の工夫

「流通されている県産の食品は全て安全が確認されたものです。また、一般市民が生活している地域の環境放射線レベルも健康影響はほとんど無いに等しいと考えられます。子どもたちの健やかな成育のためには、からだを使って遊ぶこと、旬の食材の本当の味・美味しさを知り、五感を養う暮らしが大切です。」

(iv) まとめ

「まだ言葉を発しない赤ちゃんでも、子どもたちは大人の会話を聞き、大人の不安定な心理状態を察知します。

それは決して子どもの心にはいい影響は与えません。将来起こるかどうかわからないようなわずかなリスクに怯えて暮らすよりも、生活習慣を整え、毎日を明るく前向きに暮らすことこそが、子どもたちの健やかな成育につながり、ひいてはそれが復興の一端を担うことになると思います。」

講演の最後に市川医師は、以下のように述べた。「福島の子どもたちの健やかな成育のために①繰り返し、放射能に関する正しい知識と情報を得る。②不安なこと・わからないことはひとりで悩まない。③放射線以外の健康に与えるリスクを避ける。④家族の考えはなるべく一致させる。⑤子どもの前でマイナス要素の会話はしない。なぜならば、子どもの心の問題は親の心理状態に影響されるからです。子どもを取り巻く大人たちが、心を強くかつ穏やかに自信をもって暮らす姿勢が大切です。安心する規準はどこにあるのか、除染をすることや放射能レベルをいつも気にするのではなく、その安心する規準は実は心の中にあるのかもしれない。福島に住むわたしたち、大人も子どもも明るく楽しく暮らしている姿を全国の多くの人たちに知って頂きたい。数字や言葉だけではない毎日の暮らしの積み重ねが安心と信頼の連鎖に繋がるのではないだろうか。福島の子どもたちが20年～30年後、日本一健康な大人になってほしい。」

(2) 伊藤ちはる（福島めばえ幼稚園副園長）

—東日本大震災から何を学び、どのようにいかすか—
伊藤副園長の発言で特に印象に残った2011年当初の子どもたちの様子を以下に示す。

・2011年子どもの姿と保育の工夫

今思い返すと、普段4、5月というのは母子分離不安ですごく泣く子どもが多かった。しかし、この年だけは泣きがほとんど見られなかった。これはめばえ幼稚園だけに限らず、他の幼稚園でも見られた様子のものである。その原因として考えると、急な生活の変化に対しての子どもなりの極度の緊張が見られたからではないかと考える。5歳児、3歳児の子どもたちの自由画帳を見てみると、5歳児は絵にしたり、会話をしたりすることで解消していたのだろうと考える。4歳児は、「わー！きゃー！」などと言って逃げる、ごっこ遊び、地震ごっこ、津波ごっこが多かった。3歳児は泣くなどして全身を使って出していた。

一番辛かったのが6月で、4、5月大人しく過ごしていた子どもたちもやはり戸外で遊ぶことのできないストレスやお母さんなどに禁止されることが多かったためか、奇声、けんか、不機嫌な態度、喚起には気を付けていたが、りんご病、長引く熱などが出席簿からもこの時期は1番多

かったように感じる。めばえ幼稚園には、非常勤の心理士がいて、その先生もその異様なことには気づいていて、そこで頂いたアドバイスが、呼吸を深くする遊びということだった。ティッシュを向う側まで持っていき、風船を膨らます遊びというように遊びの中から息を吐き出すことをした。それからスキンシップだけにとどまらず、体を委ねられるくらいの遊びもする。子どもにとって発散とリラックスができる場にするということが大切だとアドバイスを頂いた。遊戯室に体が動かせるような遊具を出すこと、砂遊びの代わりとなる遊び場。子どもたちにとって特別なサイバーホイールが出てくると思い切り遊ぶことができる。幼稚園の子どもは日常が遊びだから、廊下に風船がぶら下がっていたら自然と触ろうとしてジャンプする、けんけんぱが書いてあったら飛ぶ、といったことがあるので、意図的にする環境に加え、日常の中でも楽しめるようにと工夫をしてきた。

除染に関しては、夏休みに行われた。めばえ幼稚園は緑豊かな幼稚園だったが、関園長先生は身の削られる思いで、緑が無くなっていく様子を見ていた。除染は、土のほうは早かったものの、木を切らないと数値が下がらず、工事の期間は3週間の予定であったが、木を切っても切っても下がらず、市の規定になるまで40日ほどかかり、除染を終えた。除染後は、数値は上がることはなく、一定となった。こうした一番苦しい時期を乗り越え、伊藤先生は子どもたちの心に深く入り込み、より健やかな姿を取り戻すことを願う心理学の研修に出向くのである。それらの成果も含め、以下のような文章が資料として配られた。

「東日本大震災後、放射線の影響により外遊びができないう状況になり、子どもの心身の健康を保てるように保育を進めてきました。運動する場の保障、自然体験・砂遊びを補う保育。言語化できない子どもの心のケアが予測され、目の前の子どもが示すサインを読み取りながら保育を展開してきました。

月日を追うごと、子どもの姿、保育者や保護者の心理が変容し、その都度対応をしてきましたが、今もなお震災後の影響が伺われます。

幼児期は、保護者の関わりが大きく影響するので保護者支援を通して安心・信頼を得ることがなよりの土台であったことは言うまでもありません。担任は子どもにとって必要な体験や遊びを工夫する、主任は保護者支援と園全体の運営、園長は県全体や国を相手に福島の実情を伝えていく役割を担い今日を迎えています。

震災を機に、最初は失った環境を嘆くこともありました。月日が経つにつれて子どもの経験の中で何が大事か保育内容を厳選することとなりました。これは保育の真髄を見直すきっかけとなりました。

子どもの姿として、基礎運動能力低下、集中力のなさ、愛着不形成など震災だけではなく日常生活の影響も含まれることが考えられるので、子どもの姿の読み取りには十分配慮して、子どもにとって幸せな生活、豊かな体験を中心に置き、保育展開していきたいと思っております。」

現在、めばえ幼稚園は平穏を取り戻しつつある、さらなる子どもたちの健やかな育ちを願うものである。

(3) 高荒正子（社会福祉法人福島愛育園あすなろ保育園 園長）

子どもたちの健やかな育ちをめざす—東日本大震災から何を学び、どのようにいかすか—

高荒正子園長の人となりが見られる最初の発言を記載する。「園長として子ども・職員の健康を守るための改善・改修というところについてポイントを絞って今日は話したい。当保育園の位置的なもの、簡略化して話すと、社会福祉法人福島愛育園が法人で、122年前に「瓜生岩子刀自」が創立した。自園はその90周年記念事業として開設した。田沢にある山の奥深くのゴルフ場の近くに位置し、そのためあまり障害物が無く、たくさんの放射線物質が飛んできた。福島市内には線量が高い地域がたくさんあり、自園もその中の一つである。場所によっては、雨どいから落ちているところの線量を測ると、メータ機が振り切るほどである。思い出すと嫌な数字であるので、数字は敢えて伏せさせて頂きたい。

今まで、自然との共存をテーマに、自然の中で、発見・感動、五感を使い、自ら創意工夫して遊びを展開できる、主体的な子どもを育てることを祈り、理念してきたが、このようになってしまった。そのような中で最大限の安全、安心が保障できるような取り組みをして、福島で心豊かに子育てができるようにこの3年8カ月を職員一丸となって対応してきた。」

高荒園長が話された「震災からの学び」と「今後に向けて」を以下に示す。

「震災からの学び」

- ①私達は、自然の中で生かされている
 - ②地域の中で生きている（コミュニティの役割）
 - ③人の絆・輪・和・吾
 - ④人の力→困難に面した時の生きる力
 - ⑤便利になりすぎた生活の見直し
- 「今後に向けて」

- ①将来の健康のために私たちにできること
 - ・子どものリスクを最小限に抑える
 - ・保護者が安心できるようにする（安全とは言えない）
 - ・放射線量に対しての知識を持ち、正しく怖がり保護者に伝える（放射線量の危険と許容範囲など正確に理解し

て、危険回避)

- ・保護者と協議し、納得した上でやれることをひとつずつ増やしていく

②震災前の生活へ

- ・出来ないことを嘆くのではなく、できることを増やす
- ・当たり前に行っていたことができる生活を取り戻す
- ・今までなかった支援に感謝しつつ自助努力して改修する

③保育の根幹

- ・それぞれの施設の理念に基づくが、福島でもどこでも変わらない根底にあるものは同じ「子どもの最善の利益（発達と発育）を保障する」
心身が健康で生きる力を備え、幸せに過ごせる子どもの育成
- ・創始者の精神：「仁慈隠傷（じんじいんてき）」
（人には皆、他人の不幸を平気で見ていられるには耐えられない心がある）

(4) 岩田 力（東京家政大学子ども学部長）

放射能と健やかな子どもの育ち

医学・保育者養成校として

岩田 力教授は、配布資料に基づき、以下のような内容を話された。「本シンポジウムでは、市川先生により、東日本大震災とそれに伴う原子力発電所事故から生じた放射線被害について具体的に医学的な影響について言及されています。演者は、小児科医でありかつ東京家政大学子ども学部において幼稚園教諭ならびに保育士を目指す学生を教えている者です。もとより、放射線科医師でもなく、放射線に関する基礎の学者でもありません。したがっていわゆる専門家ではなく、子どもたちに向かい合う立場の者として、放射線をどのように捉え、子どもの発育と発達を保証するためにはどのように考えていくのか、私見にはなりませんが述べてみたいと考えます。

まず、大事なことは、保育者は、子ども支援の立場の専門家であるという意識、気概を持っていることです。そのためには不断の努力で新しい知識も保っている必要があります。正確な知識を持つということは、いわゆる風評に属するような根拠もなしに煽り立てるような世の中の動きに対して良い意味での批判的な視点を保つことができることを意味します。ただ、同時にどうして不安を増長するような話が出てくるのか、全くそれは根も葉もないことなのか、火のないところには煙は立たないということなのか、見極めは随分と難しいのも事実でしょう。

本シンポジウムで、残念ながら結論というものは出ないであろうと思いますが、発表を通じて問題点の共有から、将来への展望が見えてくれば良いのであろうと考えます。

ここで改めて健康とは何かをお示しします。WHOの定

義によると、健康とは『身体的・精神的・社会的に完全に良好な状態であり、たんに病気あるいは虚弱でないことではない。』良好な状態の英語は well-being が使われています。その日本語訳が適切であるかどうかは別として、注目すべきは、病気や虚弱の有無が問題なのではなくて、精神的にもそして社会的にも良好な状態にあることが重要であるという文言です。

一方で、小児科医であるということと、保育者であるということの相同性も、世界的に用いられている小児科学の教科書（Nelson Textbook of Pediatrics）の序文から見えてきます。つまり、小児科あるいは小児科医の役割は、子どもの持つすべての可能性を引き出し、彼（彼女）が大人として社会で立ち立ちできるように手助けをすることであり、そのためには、子どもたちの身体、精神、情動の発達に責任を持つことであり、さらに社会や環境が与える影響を考慮しなければならない。その影響とは子どもたちのみならず家族へもあるものであって、社会の中での最弱者である子どもの必要性、要求には特別の配慮をしなければならない。このような記述は、小児科医に限るものではなく、まさに保育者へも当てはまるものでありましょう。上記の、健康という意味をかみしめて、ながい目で子どもたちの発育・発達に冷静に関わっていけるよう、保育者を養成する立場にもあるものとして、被災地における子どもたちとその家族が、精神的にも社会的にも良好な状態で居られるよう、長きにわたって関わられるような保育者を養成していくべきであろうと考えます。」と結ばれた。

4. おわりに

幼い子どもを育てる時に一番大切なものは、「健やかな心身」である。そして、それは身近な環境を整えることや人間として必要な基本的な生活の習慣などを身につけることにより、維持充実することができる。さらに創意工夫された身近な大人による充実した保育内容展開により、健やかさは、なお一層推進されるのである。

これまで、進めさせて頂いてきた生活科学研究所温故知新プロジェクト「東日本大震災をいかに乗り越えるか—福島県における子どもの実態と保育の研究」は、ひとまず平成24、25、26年度とお力添えを頂いた皆様に感謝しつつ、3年間継続の幕を閉じさせて頂く。しかし、福島県の子どもの健やかな育ちを支援する東京家政大学の挑戦は、さらに平成27,28,29年度と続くのである。以下のような新たな実践研究が、もうすでに始動している。

〈大学間連携等による共同研究〉

研究テーマ：

「東日本大震災を乗り越える実践的研究

「福島の子どもに関わる生活と保育のさらなる充実を目指して」

研究期間：2015年4月1日～2018年3月31日（3年継続）

研究分野：保育学・看護学・栄養学

研究目的：平成23年3月11日東日本大震災は、未曾有の災害であった。特に、原発事故による福島県の被害は深刻である。この状況は、子どもたちの健やかな成長・発達に多大な影響を及ぼす。そこで、永年にわたり児童学に取り組んできた成果を結集し、温故知新プロジェクト（平成24～26年度）を実践した。その成果は、保育の本質に迫るものであり、保育実践での環境を通しての保育、用語を基盤とした保育の重要性を追認できた。これらの成果を踏まえ、研究フィールドを福島県内保育園・幼稚園・認定こども園：計3園に絞り、連携大学に災害看護および福島保育支援の実績ある2大学を選定した。そして、福島の子どもに関わる生活と保育のさらなる充実を目的とし、A：保育現場での食生活に視点を置く保育実践、B：健康増進、C：最終年度に啓蒙活動としての総括シンポジウム開催および報告書の作成・配布を実施する本研究を試みる。この実践的研究は、震災・原発事故の復興に利すると共に我が

国将来の健全な乳幼児育成に関する向上、ことに保育実践、食生活、健康増進への多大な貢献や成果が期待される。

この実践研究は、東京家政大学：家政学部児童学科・栄養学科、子ども学部子ども支援学科、看護学部看護学科、短期大学部：保育科・栄養科のほかに、日本赤十字秋田看護大学：看護学部看護学科さらに日本女子体育大学：スポーツ健康学科幼児発達学科との共同研究といった新たな視点を有する試みである。

いつの時代も困難な課題は存在する、しかし、重要なことは、その課題を雄々しく乗り越えるべく挑むことである。輝く子どもたちの明るい未来へ向かって！！

文 献

- 1) 東日本大震災をいかに乗り越えるか—福島県における子どもの実態と保育の研究 I—J. 東京家政大学生生活科学研究所研究報告, 第36集, pp. 9-17, 2013.
- 2) 東日本大震災をいかに乗り越えるか—福島県における子どもの実態と保育の研究 II—J. 東京家政大学生生活科学研究所研究報告, 第37集, pp. 1-8, 2014.